

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02877

研究課題名(和文) 在日留学生の変容と日本での生活・対人関係・就活：中韓以外の学生の増加と長期滞在化

研究課題名(英文) Transformation of international students in Japan and their life, interpersonal relationships, and job hunting: Increase in the number of non-Chinese/-Korean students and their longer stay in Japan

研究代表者

守崎 誠一 (Morisaki, Seiichi)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：30347520

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：専門学校・大学・大学院に在籍している外国人留学生について、(1)近年多様化している留学生が、これまでの中国や韓国などの学生とどのような違いを持っているのか、(2)日本の学校を卒業・修了後にそのまま日本に滞在し続けることを希望する留学生が持つ特徴、(3)日本企業に就職を希望する学生が日本独特の就職活動にどのような問題を抱え、適応しているのか、について日本留学後に日本で就職をした留学生(中国人とベトナム人)ならびに留学生に対して就職支援をおこなっている学校職員へのインタビュー調査によって明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大学・専門学校の就職支援室に勤務する職員に対してインタビュー調査を実施し、留学生の日本での就職に対する詳細を明らかにした。具体的には、(1)男女別の特徴、(2)出身国別の特徴、(3)希望する職種、などについて明らかにすることができた。

日本企業に就職が内定した中国人とベトナム人に対してインタビュー調査を実施して、両者の間での共通点と相違点について明らかにした。具体的には、(1)日本での就職を希望した時期・理由、(2)就職活動に関する情報源、(3)就職活動での困難・日本人学生との違い、(4)課外活動・日本人との対人関係などについて、国・文化の違いに伴う特徴について明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：We have conducted interviews with international students enrolled in Japanese language schools, universities, and graduate schools to find out: (1) what are the differences between newcomers international students (e.g. Vietnamese and Nepalese) and students from China and Korea; (2) what are the characteristics of international students who want to stay in Japan after graduation; and (3) what problems do students who want to work for Japanese companies face and how do they adapt to Japan's unique job-hunting process? Through interviews with Chinese and Vietnamese students, and with school staff who provide job hunting support to international students, we were able to clarify (1) what differences there are among students from China and Vietnam, (2) what characteristics international students who wish to stay in Japan after graduating or completing their studies in Japan have, and (3) what problems they face and how they adapt to the unique job hunting activities in Japan.

研究分野：異文化間コミュニケーション学

キーワード：在日留学生 就職活動 異文化適応 就職支援

## 1. 研究開始当初の背景

日本に留学する外国人の数は、2008年に「留学生30万人計画」が発表されて以来、コロナ禍の期間を除いて右肩上がりに増加してきた。独立行政法人日本学生支援機構（2023）によると、出身国別では、これまでも多数を占めていた中国と韓国からの学生がいまだ全体の5割強を占めるものの、ベトナムやネパールなど新たな国からの留学生が大幅に増加している。また、近年の留学生の特徴として、卒業・修了後に日本での就職を希望する学生が増加しており、全体の中で多数（54.9%）を占めるようになってきている（独立行政法人日本学生支援機構，2021）。しかし、実際に日本での就職を実現できたのは、全体の約3割に過ぎず、就職できたとしても日本独特の労働環境や人間関係に適応できず、早期離職する者も少なくない。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、（1）近年増加しつつあるベトナムやネパールなどからの留学生が、これまで多数を占めてきた中国や韓国からの学生と異なるどのような困難を抱えているのか、（2）日本での就職を希望する学生が、これまでのような帰国を前提とする学生とどのような異なる特徴を持っているのか、（3）日本独特の就職活動において、どのような困難を抱え、どのようにそれに適応しているのか、について明らかにすることにある。

## 3. 研究の方法

名古屋市近郊にある留学生が多数在籍する学校法人（大学と専門学校を運営）の就職支援室に勤務する2名の職員に対して、約2時間の半構造化インタビューを2017年5月26日に実施した。2名の職員の詳細は、以下の通りである。

Aさん：日本人、男性、年齢は50代後半、現職歴2年

Bさん：中国人、女性、年齢は30代前半、現職歴1年

加えて、愛知県名古屋市ならびに大阪府吹田市にある大学を卒業・修了予定で、日本企業に就職が内定した5名の留学生に対して、それぞれ約2時間の半構造化インタビューを2018年2月に実施した。5名の学生の詳細は以下の通りである。

Aさん：ベトナム人、女性、大学院生、28歳（1989年生）、2014年5月来日

Bさん：ベトナム人、女性、大学院生、28歳（1989年生）、2015年4月来日

Cさん：ベトナム人、女性、学部生、28歳（1989年生）、2012年7月来日

Dさん：中国人、女性、大学院生、27歳（1990年生）、2013年4月来日

Eさん：中国人、男性、学部生、41歳（1976年生）、2012年12月来日

## 4. 研究成果

### （1）就職支援職員に対する調査結果

日本での就職を希望する学生の特徴 大学の場合、多くの留学生が日本での就職を一旦は希望するが、実際に就職活動を始めると日本語能力が低いことを理由に自分から諦めてしまう学生も多にいる。これに対して専門学校の場合は、日本での就職を希望する学生は、専門学校卒業後に大学へ進学することが多い。理由としては、大卒の学歴がないと在留資格を得ることが難しく、専門学校卒では就職できない実状があるためである（母国で大学を卒業しているか、日本での大卒の学歴がないと日本での就職は難しい）。このように、大学・専門学校が文部科学省により管轄されているのに対して、就業に関するビザは法務省が管轄しており、就職に関連する資格によっては、厚生労働省や経済産業省などが関係するなど、さまざまな政府機関との関わりの中で留学生は就職活動を強いられる。

日本での就職を希望する学生の中で、日本でずっと働きたいと考えているのは6割程度で、残りの4割の学生は日本で経験を積んだのちに帰国をしたいと考えている。ただし、ずっと日本で働きたいと希望していても、実際に日本の企業で働く中で挫折をして帰国するものも少なくない。

性別に関しては、男子学生の方が女子学生よりも日本での就職を希望する率が高い。就職が決まりやすいのも、女子学生よりも男子学生である。男子学生が日本での就職を希望する理由としては、家族や恋人を既に日本に呼び寄せていたり、就職後に呼び寄せたいとの希望を持っていることが多いためである。

出身国別では、日本での就職希望者の割合が高いのは中国からの留学生で、近年になってベトナムからの留学生の就職希望が増えてきている（ベトナムからの留学生には就職先が比較的豊富にあるのに対して、同じように近年増加しているネパール出身の学生には就職先が少ない）。しかし、中国からの留学生については、かつては約2割しか帰国を希望せず、残りは日本での就職を希望していたが、最近は帰国希望者の割合が約3割に増加している（残りの7割の就職希望者のうち、実際に就職できるものは4割。残りの3割は、希望はするものの就職できずに帰国している）。帰国を希望する中国人留学生の増加の背景には、中国と日本の経済格差の縮小（日本で就職するメリットが薄れた）や親の希望などがある。これに対して、近年増加傾向を示しているベトナムやネパール出身の学生については、多くが日本での就職を希望している。その背景には、日本との経済格差がまだまだ大きいことがある。しかし、実際に日本で就職できるのは7割程度にとどまる。

**希望する職種** 大卒の場合は、教育機関や貿易会社の通訳、翻訳通訳業務などへの就職を希望することが多く、母国との間で母語と日本語を使った仕事に携わることが多い。大学・専門学校で福祉関係のことを学んだ学生の中で、福祉関係に就職できる学生は多くなく、多くの学生は専門性が活かせず就職先が十分でない状態である。

**就職地については、現在の居住地域を希望するものがほとんどである。**理由としては、友人もいるし、今の場所での生活に慣れていて引越しをするのが大変といったことを挙げる学生が多い。しかし、今住んでいる地域の生活に関する情報は持っていたり、就職に関する情報は必ずしも持っていないといった問題もある。

**相談として多いもの** 留学生からの相談で多いものとしては、「どんな会社に就職したらよいか」というものがある。その背景に、留学生が日本の会社や組織、文化について十分に理解していないということがある。また、「どういう会社なら採用されやすいか」「どういう会社がビザを取りやすいか」といった相談も多い。つまり、日本に滞在するということが第一の目的になっている学生が多い。このような傾向は、特に非漢字圏出身者に多い。そのほか、「履歴書・志望動機の書き方」、具体的には、何を書くか、どう書くか、自己アピールなどについての相談や、「面接」に関する相談も多い。相談というよりも“悩み”といったものとしては、地方の場合は都市部への移動にお金（交通費・アルバイトを休まなければならない）と時間がかかる、といったことを訴える留学生もいる。

**就職が決まりやすい学生** バイタリティーがあり、自身をアピールできる学生、積極的に動く学生も就職に有利である。出身国別では、中国からの留学生が就職しやすく、次いでベトナム、そしてフィリピンや韓国からの留学生が就職しやすい。ハングリー精神が強いネパールやカンボジア出身の学生も就職しやすい傾向がある。

**指導をする中での困難** 日本での就職活動において日本語の能力は必須であるが、必ずしも日本語能力が十分ではない学生が少なからずいる。そのような学生の中には、日本語が上手ではないがどうしても日本で就職したいという学生もあり、自分の思いに日本語が追いつかないというケースもある。そのような学生は、特に専門学校生に多い。また、多くの留学生が長期のアルバイト経験（3年から6年）を有しているが、就職をアルバイトと同じだと考えている（考えの甘い）留学生がいる。日本独特の就職活動や文化を理解させることが容易ではないため、就

職フェアに行かせて日本人学生がどのように活動しているのか体験させるように努めているが、就職への意欲を高める留学生がいる一方で、逆に日本での就職をあきらめてしまう留学生もいる。そのほか、エントリーシートが書けない学生も多い。

テキストマイニングによる分析結果 インタビュー調査データに対して SPSS Text Analytics for Surveys ver.4.0 を用いた「感性分析」を実施した結果、抽出された「感性タイプ」のキーワードは全部で 246 個あり、そのうち肯定的なキーワードは 77 個(全体の 31.3%)、否定的なキーワードは 107 個(全体の 43.5%)であった。つまり、否定的なキーワードの方が、肯定的なキーワードよりも数も種類も多く、外国人留学生の就職に関して就職支援室の職員が相対的に否定的な語りをしていることが明らかとなった。引き続き、上述のキーワードに対して「出現頻度」(カテゴリをもつアイテムのための最小レコード数を 10 に固定)に基づくカテゴリ分けをおこなった。その結果、抽出されたカテゴリは、回答レコード数(Figure 1 の中では、○の大きさを表示)の多いものから「留学生(96)」「就職活動(43)」「ピザ(24)」「母国(23)」「日本人(21)」「日本語(15)」「大学(14)」「アルバイト(11)」「先生(10)」「仕事(10)」「文化(10)」「勉強(10)」の 12 カテゴリであった。それらカテゴリが、それぞれどのように関連しているかを共通する回答の数(Figure 1 の中では、線の太さで表示)によって図式化した。

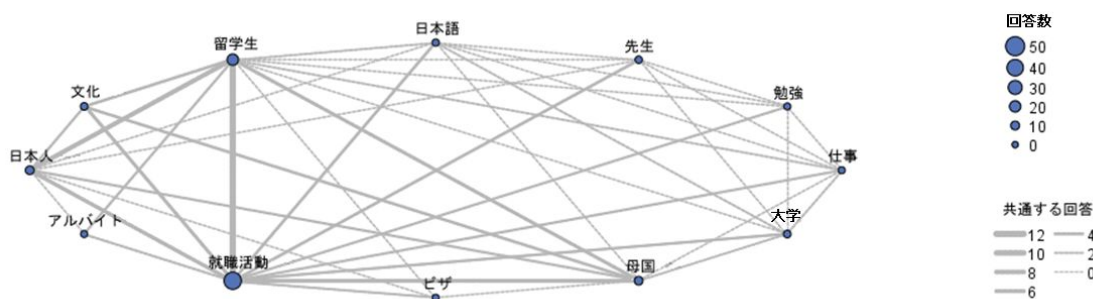


Figure 1. 就職活動を中心としたカテゴリ間の関係

「就職活動」に注目して他のカテゴリとの関連性を見ると、留学生の就職活動に関するインタビューであったことから「留学生」と共通する回答が 11 と最も多いのは当然のことであるが、「母国(6)」「文化(5)」「日本語(4)」「先生(4)」「勉強(3)」「仕事(3)」「日本人(3)」「大学(2)」「ピザ(2)」「アルバイト(2)」などとの関係で「就職活動」が語られていたことが明らかとなった。

## (2) ベトナム人留学生と中国人留学生に対する調査結果

日本での就職を希望した時期・理由 【ベトナム人学生】留学当初は、日本での就職を考えていなかったが、日本での生活が慣れた環境となったことから考えるようになった。また、ベトナムと比べて日本の治安が良く、食べ物が安全であること、また、日本人の真面目な働き方や日本の文化に対する興味なども日本での就職につながった。そのほか、28 歳という現在の年齢は、ベトナムでキャリアを積み始めるには遅いが、日本では遅くないことも日本での就職を考えた理由である。【中国人学生】大学院生については、大学院進学後に日本での就職を考えるようになった。理由は、留学後に自身の日本語能力が向上していくことが嬉しくて、もっと日本語能力(仕事に使う日本語も含めて)を上げたいと考えた。そのほか、日本での生活の便利さも日本での就職を希望した理由である。学部生については、当初、日本での就職と中国

に帰国して日本語教師になることの両方の可能性について考えていた。後になって、もともと日本の環境の良さに対するあこがれもあって、日本に住み続けたいと考えるようになった。【結論】日本での就職を希望した時期と理由には、ベトナム人学生と中国人学生の間で多く点で共通する部分が見られた。

就職活動に関する情報源 【ベトナム人学生】マイナビやリクナビ、ハローワーク、留学生向け就職フェア、大学の進路指導室などから情報を得た。就職活動に慣れてきてからは、より個人で活動するようになり、活動を通じて出会った自国人と情報交換などもしていた。【中国人学生】大学院生については、マイナビやリクナビなどのウェブサイトのほか、大学のキャリアセンターや合同説明会などから情報を得ていた。日本人との情報交換は全く無く、自国人についても既に就職している元留学生からアドバイス(どの時期にどんなことをしたらいいのかなど)をもらった程度であった。学部生については、大学やネットから個人的に就職に関する情報を集めていた。大学院生と同様に自国人の先輩からは、就職に必要な情報を得ていた。【結論】ベトナム人学生と中国人学生の情報源は比較的共通していたが、自国人との情報交換が中国人の間ではあまり見られないという特徴があった。このような傾向は、中国人留学生の中に、就職活動において自国人をライバル視したり、自身の就職がうまくいかなかった際に恥をかきたくないで本音を隠す傾向があるためだと考えられる。

就職活動での困難・日本人学生との違い 【ベトナム人学生】自身の専攻と関連する仕事の募集が少なかった。また、日本での就職は日本語だけでなく英語が必要で、英語ができないと選択肢が狭まると感じた。同じ留学生であってもベトナム人向けの募集は中国人向けより少ない。日本人学生との違いについては、大学院生は違いや気になったことなどは無く、逆に、ベトナム語ができることが有利と感じた。学部生は、日本人の方が仕事の選択肢が多かったり、有名で大きな会社の募集があるなど有利であると感じた。【中国人学生】大学院生については、最初、日本の就活のやり方がわからなくて不安であったが、3か月くらいで少しわかるようになり不安も減ってきた。それでも、内定を得るまでの期間が長くて大変で、特にグループディスカッションなど周りがほとんど日本人の中で意見を言うときに、聞いてもらえなかったり、距離を感じた。そのほか、企業ごとに受ける試験(SPIや玉手箱など)が違ったり、就職活動に伴う出費(交通費など)も負担であった。日本人学生との違いについては、合同説明会でのメモ取りの大変さや日本人なら当たり前知っている就職活動に関わる情報の不足、OB・OGとのつながりのなさ、など様々な面で違いを感じた。学部学生についても、エントリーをして、企業からの連絡を待って、それから審査を受けて、という就職活動の一連のプロセスを大変だと感じた。特に、男性は女性よりも就職に不利だと感じた。【結論】ベトナム人学生と中国人学生の間で違いが見られた。理由として、中国人が日本人と同じように就職活動ができる(同じ漢字文化圏であったり、比較的文化に共通性がある)ことが、逆に日本人学生と対等に競争しなければならないことにつながり、ベトナム人にはない中国人独特の困難や日本人との違いの意識につながったと考えられる。

#### <引用文献>

独立行政法人日本学生支援機構(2021)「令和元年度私費外国人留学生生活実態調査概要」  
[https://www.studyinjapan.go.jp/ja/\\_mt/2021/06/seikatsu2019.pdf](https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/06/seikatsu2019.pdf) (2023年6月1日閲覧)

独立行政法人日本学生支援機構(2023)「2022(令和4)年度外国人在籍状況調査結果」  
Retrieved from <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2022.html> (2023年6月1日閲覧)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 守崎誠一 内藤伊都子
2. 発表標題 就職支援職員の語りからみる留学生の就職活動：質的 / 量的なアプローチからの比較
3. 学会等名 多文化関係学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 守崎誠一 内藤伊都子
2. 発表標題 日本で就職する留学生の戸惑いと適応
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 守崎誠一
2. 発表標題 入管法改正と在日留学生
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会関西支部
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 守崎誠一 内藤伊都子
2. 発表標題 留学生は日本での就職活動にどのような問題を抱え、適応しているのか
3. 学会等名 多文化関係学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 守崎誠一 内藤伊都子
2. 発表標題 日本で就職する留学生の戸惑いと適応
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	内藤 伊都子  (Naito Itsuko)  (90569708)	東京福祉大学・教育学部・教授    (32304)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------